HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヘンリーベリング 勞働党の起源(一八八〇年ー一九〇〇年)
Author(s)	清水, 昭典; SHIMIZU, Syōten
Description	書評
Citation	北海道大學 法學會論集, 6, 142-147
Issue Date	1956-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/27748
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P142-147.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ヘンリー・ペリング

労働党の起源（一八八〇年—一九〇〇年）

Henry Pelling, The Origins of the Labour Party 1880–1900

清水昭典

本書は最近頻繁に刊行されているイギリス労働党に関する諸著作の中でも最も新しいものの一つに属する。その見解も従来の政党研究家、歴史家はもとよりギルド社会主義者等とも異なりマルクス主義的意識の上に立つて叙述を展開している。しかし著者は、労働党成立の過程において、マルクス主義が採用されているという見解に立ち、これ程マルクス主義者らしからぬマルクスの徒は珍らしいといえよう。

ペリングの著作は本書の外に〝初期独立労働党の起源〟（一九五三年）があるだけで、彼の研究の関心は専ら一八八〇年以後の労働組合の独立政党形成過程に集中されている様子である。

現在彼はオックスフォード・クイーンカレッジのチューターの地位にあり研究歴はさして深くないと思われる。しかし詳かではない。

叙述の構成は十九世紀末葉二〇年の刻明なクロニクルの形式をとつており、著者はこの年代に現在の労働党形成の契機を求めている。

即ち「社会思想の潮流は八〇年代において重要な変化を示す。即ち不況の衝撃によつて不利な影響を蒙つた産業及び商業は憂慮すべき状態に陥りレッセフェールが国富をもたらすという原則は困難に直面した。そしてこれとひきかえにフェアトレードの戦術の発展が社会主義者の形成を促した」のである。

抽象的古典経済学から離脱した人々は改めて具体的に歴史過程を捕捉し、ここから露頭化した産業構造に分析を加えるようになつた。

産業は所有者の個人的管理から株式会社の非人格的技術的統制に委ねられ、ここから次第に劃一的総体としての労働階級が形成

されつつあつた。又生産・分配・交換のメカニズムから限界効用理論（フェビアン主義）疎外され剝奪される者達の階級的意識から労働価値学説（マルクス主義）が定立されたが其の他多彩な社会主義理論の復活がみられたのである。

一方労働組合の外延的拡大は産業別組合の発達を促進し（新組合主義）彼等の政治的集団化は政府に一八八四・五年の選挙法改正をおこなわせるに至つた。

かくて、社会主義学説と労働階級（具体的には自発的結社群たる労働組合）との関連を基底として、彼は労働者の近代的政治機構への直接参加の過程を述べているのである。

先ず「第一章序説・第二章社会主義者復活・第三章社会主義者の戦術論・第五章新組合主義の影響」では大体九〇年までのイギリスの経済の状況と社会主義者の行動について触れている。

八〇年代初期のロンドンは社会主義鎮圧法の弾圧によつてドイツを亡命した社会主義者達の植民地と化していた。そしてイギリスの中間階級的知識人・年老いた昔日のチャーチスト達と亡命社会主義者との交流がこの植民地の溜り場ソーホー街において頻りとなつてきた。同時に当時頻発した社会問題 ミランカシア毛織労働者の罷業開始・スコットランド高地帯及びアイルランド農民の騒擾・ロンドンの失業者行進・鉄道国有化問題 等々は自由党急進派の統治を乗り越えて発生し、前述の人々は夫々団体を結成し問題解決案の提示、更には実践活動に身を投じていつたのである。

この間の叙述は豊富な資料を用いて、指導者・団体・その機関紙・事件等を記載しているが、単に羅列的記載にとどまり、事件の内容、その結果等については触れるところが少ない。二五〇頁という歴史書としては小冊に属する本書の体裁のせいか、或は単に資料的価値を認めるに止めて、意識的に内容の説明を省略したものであるか分明ではないが評者にとつては心残りである。

尚当時の主要な社会主義者団体としてはSDF（社会民主連盟）及びここから分裂したモリス一派のSL（社会主義連盟）それからフェビアン協会を挙げ夫々の団体の議会政治、特に選挙に対する態度、戦術からこの三団体を典型化し、社会主義者の間に三つの政治意識の系流が存在したことを著者は暗示している。そして更にこれらの団体に対する著者の価値的判断が加えられるのである。先ずフェビアニスト達のエムピリカルな改良主義的主張は既成政党に依存する改良に過ぎず、既成政党に交代する新政党を結成し、これを通じて改良をおこなおうとするものではなかつたことを指摘し、これでは自由党という体制的な政党に労働票を投じても決して労働者の利益は具体化されず只自由党に社会政策的イデオロギーを彼等の面紗として与えるにとどまつたことを暗示している。

又SDFにおける経済理論偏重は産業家に対する直接の反抗理論・組織を活潑にすることは出来ても、それだけでは効果は乏しく、且つ政治的組織化即ち、選挙戦術及び議会活動に対する空白を招き、この間隙から個々のメムバーの放恣無軌道な選挙運動、即ち既成政党指導者達の抗争につけこんだ選挙区協定、収賄等の堕落を生じたことを述べている。更にアナーキストを擁するSLに至つては「政治における腐敗と妥協が社会主義観念の純粋性を

「墮落させる。」というモリスの言葉を引用し、彼等の見解が政治の存在力を見落したことを指摘している。

しかし如上の敍述は略常識化された見解であつてこのあたりまでは特にオリジナルな見解はみられない。只著者はSDF・SLの存在の積極的意義がその社会主義的行動にあるのではなく理論にあるとし、九〇年代の広汎な社会勢力が経済理論を政治の場において具体化するまでの伏線を用意したものであろう。

尚著者はSDFの独立の代表（下院議員）選出の戦術について触れ、SDFがアイルランド国民党の議会進出・その保守自由両党に対する巧妙な術策に刺戟され自己の選挙戦術を真剣に検討するようになつた過程を重視している。

又後章においてILP（独立労仂党）の形成がやはりアイルランド国民党の議会進出に負うものであると述べているが、之等は独立の労仂者政党形成の為の側面からの影響に過ぎずイングランド及びスコットランドの労仂組合自身の政治化の原因と結果を明確にするものではない。

アイルランドの議会進出がいかに組合指導者、社会主義者に強烈な印象を刻みつけたことかという彼等の心理の動きがよく活写されているがそれだけでは不足であろう。

この外にも〝新組合主義の影響〟の章における組合と雇傭者との対立、その集中化、両者夫々の内部グループにおけるネットワークの緊密化、等を論ずる部分でもこのような現象が雇傭者・組合運動家夫々のアメリカ人との交流、アメリカのトラスト及び産業別組合の視察に負うという説明は前者と同様の突つ込みの不足を覚えさせるものである。

本書が個々の労仂組合、その指導者、並に社会主義者の政治的役割については詳細な敍述と検討をすすめておりながら、その素材のとりあげ方が偏頗に失し公正な検討とはいい得なくなつたのはそれが労仂組合の総体及び当時の組合群の多元的な性格の諸関連が捉えられていないからである。又これこそ前述の歴史の転換点たることを示す二つの重要な部分の敍述をいささか浅薄にし、エクスターナルな諸事実を援用することに了らしめた原因となつたのである。（イギリスでは労仂組合の研究は他国に比して進んでいるといわれているが今日の学問的成果は未だ地域差・職業差熟不熟差等の詳細に亘つての組合の研究にまでは及ばず従つて組合総体の構造については再検討が必要であることを著者自身弁疏している。）

次いで〝第四章コーカスへの挑戦・譲歩及び滲透〟で著者は自由党の選挙機械と化したコーカスの凝固とこれに対する労仂組合の挑戦、知識人の宣伝活動に説き及んでいる。

元来イギリス政治の伝統として、議会は、殊に政党はプログラムを提示せず、自身の不拘束的態度は政党に情況の急迫的変化をも受容克服する能力を与え、政党を一つの可動体としてきたのであるが、著者はこれを自由党の態度から説明する。しかし六七年の選挙法改正は熟練労仂者の選挙権獲得から国民自由連合（NLF）の結成をもたらしこれが自由党の投票機械となつたことを暗示する。そして熟練労仂者の中産階級的意識擬制は彼等を地方の中産的企業者と連携させるようになり、ここから労仂階級の利益

とは背馳せる組織即ちコーカスシステムが凝固し自由党の可動性を抑止した事実を指摘している。

しかしながらもはや九〇年以後になると不熟練労働者の目にもコーカスのプルトクラシーは明白であつた。地方の工業都市における職業構成の単純と地域の狭少はコーカスが労働者の直接代表選出を遅延させていることを目覚めさせるのに役立つたのである。

ケアハーディの主張する「労働と自治」はコーカスへの挑戦となつた。労働組合指導者達は自治体機関に直接参加することによつてコーカスの役割を減らしていつた。市町村参事会・教育委員会（ティ・タウンカウンシル・スクールボード）への労働者の委員選出が徐々に成功しはじめたのである。これに伴なつて自治体に対し公共浴場・クリケット競技場・住宅・公立学校等福祉施設の設置が要求されたのである。

又地方自治体の選挙における組合の投票集中戦術（ブランキング・キャムペイン）が彼等にとつて下院議員選出戦術の鍛練となつたことを著者は指摘する。

更に福祉化の点ではフェビアンの滲透活動、クレリアンの説教SDFの地方活動等の相互援助は社会主義者同志の間にも協力がおこなわれ、加えて彼等と組合との協力の具体的機会が生じたことを指摘する。

しかし他面地方の政治行政活動を通じての労働者の利益の充足は、十九世紀末イギリスの国際貿易の地位がいかなるものであるか（中央政治への関心）という政治の見通しを労働階級をして失わせるに至つたことを述べている。又八時間労働制・最低賃金・労働権の確立等主要な社会主義的原則は自由党の中央政治によつて行われ、依然として労働階級の支持は（特に北部炭鉱地帯の積極的支持は）自由党に与えられていたことを指摘している。

それ故選挙においては既成政党の配分構成を変えることはあつても議席を持つ独立の労働者政党は誕生しにくかつたことを指摘している。

彼述は更に「第六章国民的独立労働党の成立・第八章初期ILP・第九章セクショナリズムの統合第十章組合の転換」に及んでいる。

当時ロンドンの社会主義者（主としてSDF）は今日の労働党の最大綱領となつた「生産・分配・及び交換の公有（コレクティヴ・オーナーシップ）」を主張しブラッドフォード会議でそれが採択されたが、同時にその時創立された新党の名称争いがあつた。

SDFの主張〝社会社会主義労働党〟はTUC（労働組合会議）の〝社会主義嫌い〟を怖れたケアハーディの主張〝独立労働党〟に投票で敗北したのである。

ハーディは社会主義者ではあつた。しかし彼は議会の体制の可否を論ずることが現実にはランカシア毛織労働者に対して如何なる結果を招来するかを経験的に知悉していたのであつた。社会主義は未だ望蜀であつた。のみならず自由党を攻撃することすら一時的には不利な戦術であつた。著者はハーディの九五年選挙の落選を彼の自由党攻撃に原因すけている。

加えて著者はSDFの徒をナロードニキにたとえその九五年以降の堕落を指摘している。

一九〇〇年に至ると、ILPは更に社会主義からの戦術的後退を示すに至つた。（この間の叙述は苦渋をたたえ首尾一貫してい

ないようであるが。）TUCと社会主義者の連合組織体たる選挙対策機関LRC（労仂代表委員会）において、ILPのラムゼーマックナルドはその書記に指命された。しかしハーディは選挙に臨んで「労仂者に直接利益をもたらす立法活動・之を行う政党とは協力する。」という修正声明を発表し、自由党を刺戟しない態度をとつたのである。又著者は一九〇〇年以後労仂党（正式の設立は一九〇三年）指導者と自由党院内幹事との選挙における取引交渉があつたことを指摘しているが只その事実があつたことを触れるに止めている。

かかる情況から社会主義そのものに対しては迂遠であるが社会主義的信条を持つ労仂階級が労仂党を生み出すに至つた過程を著者は史実をとつて説明する。しかし当時の〝社会主義〟に対する労仂組合指導者の反感は著者以上に強調されなければ公平とは言い難いのではなかろうか。保守的な歴史家サマーヴィルは一九〇〇年の総選挙でマックドナルドが社会主義という言葉の使用を意識的に回避したことを指摘しているが、これは労仂党を研究する場合に看過し得ない大きな事実であろう。少数の社会主義者の主張がイギリスの支配層に恐怖の念を与え彼等をして労仂階級に対する譲歩を強要したことは確かであるが支配層の譲歩（特に政治的行動の自由を与える譲歩）が進むにつれて社会主義の主張は緩和されていつたのである。一九〇〇年から八年までの労仂党構成員の急速な拡大は自由党系労仂組合の大量参加に負うもので、参加の増加に比例して社会主義勢力は縮少し変質し或は疎外されていつたのである。

かくて労仂階級の政治組織化は一応達成されたかの如き表見をとりつつその実は体制に変革はなく、機能的には労仂党は資本主義支配層の利益を維持確保しつづけたのである。

著書の如く労仂階級の政治化の過程から社会主義にふさわしい内容をひき出すことも可能ではあろう。しかし労仂党はむしろ復雑多様な種々相を呈しているのであつて、一九一八年における社会主義綱領の確立と雖もかかる種々相の一面を示すものであつて、これによつて社会主義が一応達成され綱領が直ちに党の核となつたというのは評者には肯定し難い。

労仂党研究の成否は社会主義の普及ぶりを説明することよりも寧ろ労仂党総体の種々相のコンテクスチュアを解明することにかかつているのではあるまいか。特に八〇年以後の歴史を対象とする場合にはイギリスの集産主義の構造がここで問題になるのではあるまいか。集産主義はそこから社会主義と国家社会主義的性格という全く相反する社会組織理論に分極する。集産主義は又高度の計劃統制を必要としこれに見合つて執行部は専門化能率化しその執行活動を拡大する。更に執行部は行政作用のみならずその能力を駆使して、事実上立法過程に干渉し、労仂党の政党政治遂行に脅威を与えている。又執行部の首長たる首相或はそれに匹敵する人々、即ち国民的指導者達は執行部の拘束をうけてその意向を統合し具体化する傍ら、彼のきらびやかな人気と高度化された執行能力は復雑で不統一な政策の執行ぶりをおおいかくし、労仂階級の政党を通じての政治権力に対する実質的拘束を喪失せしめるに至つている。

集産主義の構造から派生せるこれらの諸問題は労働党の起源と共に発生したものである。

これを閑却視しては労働党起源の研究は不適切である。

しかし尚且つ著者は歴史の研究を通じて人間の理性的意図が「未来えの期待」を意欲工夫せしめその具体化された内容が社会主義であることを指摘する。

「第十一章結論」において著者は「信条としての社会主義」を強調し、現代を原始キリスト教、カルヴィニズム初期の時代にたとえ、社会主義的実践的意欲こそ幾多の過誤を乗り越え、人類の文明を発展させるものであると説いている。かように著者の謂としての社会主義は具体性を包む概念として把握されるよりもむしろ歴史の進歩の法則といったやや茫漠とした意味を与えられている。原始マルクス主義と労働党の社会主義が同質的にとらえられ得るのは、理論の密度の粗さによるといえよう。

以上の内容を紹介してみて省みるに評者は専ら本書の構成的骨格のみを問題にし叙述の律動を伝え得ていないことに気付くのである。

本書の著者も伝記叙述に巧みな英国史家の例に洩れず、登場人物をよく活写し得て、そこに著者の息ずかいが感ぜられる。殊に九〇年以後の部分は構成的叙述をとらず人物政治史の如き印象をすら与える。ハインドマン・チャムピオン・ベンチレット・トムマン・ケアハーディ・ラムゼーマックドナルド等々多彩な人物の性格が浮き彫りにされ、又彼等相互の交流、選挙、労働組合に対する彼等の指導、ILP大会、自由党に対する各人各様の態度が刻明に叙述されている。又そこから当時の中産的出身の社会主義者と組合出身の社会主義者の交代過程を暗示し、加えて同年代の政治過程——新組合主義、ILP・LRC結成の気運、TUCの政治化——を捕捉し得ている。

彼の八〇年代に対する判断作用の強い叙述に比し九〇年代では指導者に焦点ををむけつつ史実が丹念にトレースされ却つて後者を興味深くしている。しかし指導者と組合との関係にあまり触れていないのは残念である。

又ILPのケアハーディ、イコールLRCのマックナルドという両者の行動の一体的処理の仕方は少し安易ではあるまいか。両者の行動の共通点に注目するよりもむしろ相違点に注目するところに一八九五年から一九〇〇年に至る期間の、巨きな変化の姿をはつきりさせる鍵があろう。マクドナルドが社会主義という言葉を使用しなかつたことは重要である。